

家庭的果樹の栽培……(二)

田村勉

本誌五月号に引続き家庭果樹を中心にその栽培について述べることとする。

五月号では種類、品種の選び方、植付の方法、春先の誘引、施肥等について書いたのが今回は最初に理想とする樹の形即ち樹形から話を進めよう。

樹の形に対する考え方

果樹を植付けた場合に初心者は勿論、相当年期を入れた人でも将来どんな形に樹を仕立てるべきかについて思い悩むものである。

元来果樹と云えば極端に枝を切詰め、出来るだけ枝を「ジクザク」に曲げて人工的に形をつくる事を以て、果樹本来の姿のように考えられて来た。

盆栽を愛でるように曲つた枝をたのしむのならばいざ知らず、立派な果実を多く穫るためには樹に無理をさせたり、極端な形に切詰めたのでは本来の目的を達することは出来ない。理想的な樹の仕立方に対する一般的な考え方を述べると次のようになる。

1 樹を早く大きくするために若木の中は余り手を掛けない。風通しの悪い日陰の枝を払う程度に止める。植えられた苗木の成育は根から吸収された無機成分を基礎として、これに葉で作られた同化養分(緑色の葉の部分で日光の力を借りて作られた糖分と思えばよい)が大きな役割を果たしている。従つて枝を切る量は出来るだけ控えて樹についている葉の量を極力多くしてやるのが望ましい。

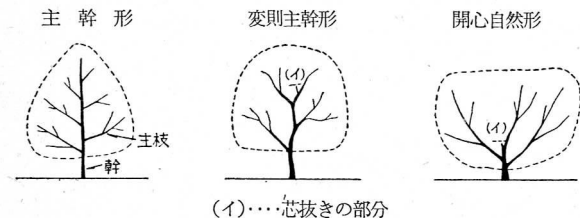
2 若木の中から将来仕立ようとする樹形の基本になる枝(専門的には主枝と呼んでいる)を決めてその成育を助長する。主枝になる候補枝を予め決めてかからねば、太くて結果しない不生産的な枝が多くなるばかりでなく、日陰が多くなつてうまくない。(従来のお木はこの弊害に陥つて

3 それぞれの果樹の種類による性質の違いをよく生かし、樹の性質に合致した樹形を選ばなければならぬ。云い換えると樹の自然の姿に近い形におさめ、主枝を延長して伸ばす場合にも真直に出来るだけすなおに伸ばすように努める。

各種果樹の基本形を次に挙げて見る。(図1参照)

(1) 主幹形 (円錐形)
最も一般樹木の自然の姿に近似した形で、芯が樹冠の主幹が樹冠の中心を頂端迄貫いている樹形である。果樹の種類としては「さくら

図1 果樹仕立の基本形



んば「くるみ」等にこの形が用いられる。

(2) 変則主幹形

苗木を植付けて数年間は主幹形と同様に芯を立てて育て、その後一定の高さで芯止を行うと同時に主枝の数も三〜四本に制限して行くものである。即ち毎年適当に側枝を配置しながら主幹を四階位迄成長させる。

ここで「芯抜き」を行い、主幹の高さを三階内外に止める。そして毎年養成してきた側枝の中から間隔、角度等適当なものを三〜四本選定して主枝とするのである。

この樹形が適当な果樹としては「りんご」「なし」「ぐり」等が挙げられる。

従来「日本なし」(長十郎、二十世紀等)は本州方面では棚仕立がやられて来たが、特に風害の虞れある土地を除き、だんだんこの形に切換えられるものと思う。

(3) 開心自然形

これは樹が横に開く性質のある「もも」「すもも」「うめ」等に利用される。

積雪の量で異なるが地上五〇〜七〇センチ第一の主枝を出させそれから約三〇センチの間隔を置いて第二、第三の主枝を幹の周囲に平均して配置する。これに上下適当に枝を分配し、厚みのある盃状に樹を仕立てて行くのである。

いすれ剪定整枝についてはぶどう等をも含め又改めて詳しくのべる事にしたい。

実止り、摘果、袋掛け

1 実止り

果樹は実を穫るのが目的であるからいくばくの花の数多くても、この花が止らなければお話しにならない。そして花が果実となつて発育していく為には、必ず花粉が「メシベ」の先(柱頭)について交配が行われることが前提になる。

大部分の果樹はこの花粉の媒介が昆虫(ミツバチ、ハナアブ等)によつて行われる。そこで果樹の交配を確実にして、実止り歩

合を高めるには五月号で書いたように、花粉提供用の品種(授粉樹)を植付の時混植すると共に、昆虫の活動を助けるための方法を講じなければならぬ。家庭果樹で二〜三本植つている場合は殊更に授粉に注意しなければ止りが悪くなり勝である。

昆虫は雨天或は曇天で気温の低い時(一五。以下では甚だ飛来昆虫数が減じる)又は風当りの強いところは活動が甚だにぶ

少くなる。従つて開花時は少しでも風当りを少なくするように工夫することが望ましい。簡単な風除けをつくるのも一方法である。

又開花時期は丁度害虫の活動も激しくなるので種々の駆除剤を散布することが多い。この薬剤散布が花粉運搬に飛来する有用昆虫をも殺し、又は忌避剤となつて果樹への訪花を少くする場合が多い。従つて開花時の殺虫剤散布は出来るだけ行わないのがよい。特にDDT、BHC、硫酸ニコチン、その他の有毒燐製剤を用いてはいけない。

一方家庭の果樹は本数が少ないのであるから人工交配の実施は大いに効果を挙げることが出来る。即ちりんごを例にとるならば開花間もない花を朝の中に集め乾燥した場所に紙上に掲げて置き、暫くしてから紙にくるんで振ると花粉が離れる。(ヤクから離れ難い時は筆等で払い落とす)。この花から筆の穂先につけて目的とする花のメシベの先を軽くなでるとよい。このように丹精するところに又一層果樹に対する愛着と妙味が生まれた来るものである。

2 実すぐり(摘果)

これは成り過ぎた余分の果実をもぎ取る作業である。専業の果樹園に於ても同様であるが、特に家庭果樹として植えている場合は殆ど「実すぐり」を行わず極度の成らせ過ぎになつていく場合が多い。

樹の上に結実した果樹の数が多過ぎると、根から吸収される養分や葉でつくられる養分が果実の発育に使われるだけで精一杯となり、枝や根の成長に用いられる分が

不足し、樹が衰弱して病気等にもかかり易くなる。そればかりでなく個々の果実そのものの発育も又品質も低下して、着色の悪い酸味の強い果物が出来て了う。更にこのような樹では米年の果実のものとなる花芽の出来が悪く、毎年続けて収穫をあげる事が出来なくなる。「成り年」と果実の成らない「休み年」が交互に来るような樹は、果実の成らせ過ぎに原因がある場合が多く、適度に実すぐりを行うことによつて防ぐことが出来る。

(1) 実すぐりの時期

この時期は開花後早い程効果が大きい。しかし余り早く行くと残した果実がその後色々の原因で落果し収穫果が減少する。かと云つて余り大きくなり過ぎてからではそれだけ養分が無駄になり、実すぐりの効果が少くなる。それぞれの果樹の種類で異なるが、りんご、なしでは開花後大体二〇日前後、丁度果実が拇指大になつた時が適期である。(集約的に行う場合にはそれ以前に「荒すぐり」をして置き、この時期に仕上げをするのが理想的である)

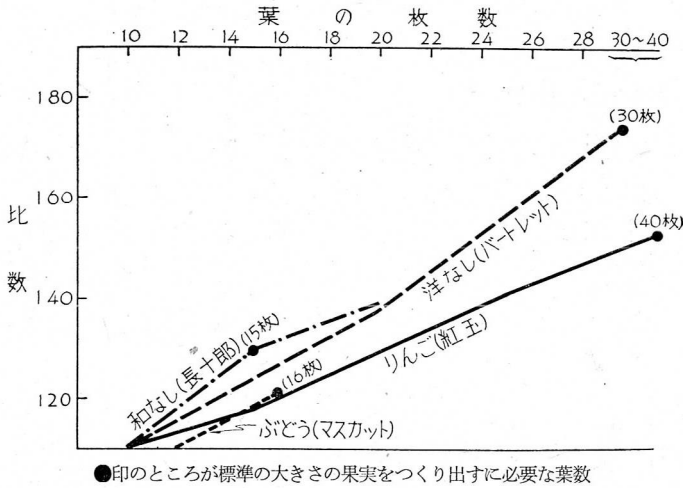
ぶどうは北海道でつくられているアメリカ系の品種は実すぐり(粒抜き)を行わぬのが普通である。しかし実すぐりの効果はあるのであつて、成り過ぎと思われれる時には小形の房を間引し、更に果実が小豆大位の時に発育の悪いものを粒抜きすると、熟期が揃い、品質の良好なものが収穫出来る。

(2) 実すぐりの要領

先ず第一に知らねばならぬのは実すぐりの程度である。即ち品質の良好なものを、毎年、しかも出来るだけたくさん収穫するには、どの程度もぎ取れば良いかということである。目安を立てるにはいろいろの方法があるが、前にも書いたように果実の発育を支配するのは葉でつくられる養分が主体をなすので、葉の枚数を標準にして決めるのが最も好都合である。もつとも

図2 果実1個をつくるに必要な葉の枚数

(マグネス、川口、ウインクラー氏の調査から)



葉の枚数とはいつでも病気が害虫の被害を受けたもの、あるいは樹の勢力が衰えていて形が小さく、活動力のない葉では役に立たぬから、あくまでも健全な葉についてのことである。

各地の試験機関でなされた試験成績から一個の果実を完全に発育させるために必要

な葉の枚数は(図2)の通りである。これによるとりんご、洋なしは三〇〜四〇枚、和なし、ぶどうは一五〜二〇枚の葉があると一人前の果実が生産されるものと考えてよいわけである。このことから考えれば、りんご、なし等で実止りの良い樹では、一五〜二〇コに一個の割で残すと丁度

よい勘定になる。次に実施に当つて注意すべきところを挙げて次のようである。

- ① 病気や害虫におかされているものを最初に排除。
- ② 果実に障害がなければ早期に開花し、残す果実の大きさを出来るだけ揃えることが望ましい。
- ③ 一本の樹でも日当りの良い頑丈な枝には多目に成らせ、条件の悪い枝には少な目にして、總体的に見て一本の樹に成らせる数を決定するがよい。
- ④ 一本の枝に着いた果実でも真上に向いているもの(落果し易く又日焼等を起し易い)、反対に真下に着いたもの(前者とは逆に着色が悪い等いわゆる「ウラ成り実」になる)は排除。

3 袋掛け

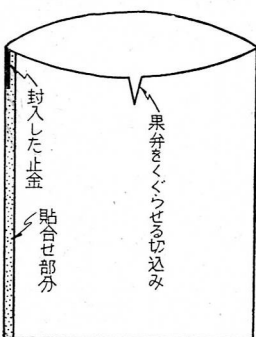
袋掛けの目的は害虫や病気の予防が主で、加えて果実の外観を良好にするところにある。最近専業果樹園では生産費を下げるために薬剤散布による無袋栽培が各種の果樹に普及されて来た。しかし家庭

的栽培では、りんご、なし、もも等袋掛けを行うのが安全である。自家用果樹で折角栽培していながら、葉も撒けず、又袋掛けも行わない樹をよく見受けるが、これら最初から植えぬがよい。

(1) 袋掛けの時期

この時期は開花後いくらか早くてもよいわ

図3 止金入四角袋



けである。しかし余り果実が小さいと袋が風で落される心配があり、又実すぐりをしてからでなければいけないので特別の場合を除き開花後二〇〜四〇日位に行われる。遅れて果実に入るシンクイムシ等が既に産卵してからは全く意味がない。札幌地方を例にとると、年により虫の出方で異なるが、六月中頃から七月五日位までの間で異なり、それ以後では殺虫剤を撒く等、特別の処置を行つたもの以外は袋掛けの効果がない。特になしに入るシンクイムシの発生は早

(2) 袋の作り方

毎年、袋掛けの時期になると、袋の入手法について相当多数の問合せを受ける。専門に果実袋を製作している商社もあるのであるが、僅かならば自家製作が早途である。(購入する場合は二〇〇枚単位で二〇円前後である)説明はむずかしいが一応次のべておこう。

材料は新聞紙(傷のないもの)を用い、一枚を一四枚と呼ぶものを一四切、一二枚のものを一二切と呼んでいる。これを糊で貼合せ四角な袋をつくる。空いている口の片側(紙の)中央に二〜三センチ切目を入れ、果実のツル(果梗)をくぐらせる部分とする。

掛けた袋を落ちないようにおさえるには止金(薄いトタン板又罐詰の空罐を幅一〜二センチ、長さ三センチに切つたもの)を用いる。袋を貼合せる時、糊付の部分に予め封入して置くことと便利である。(図3参照)